

子どもが生きる国語科学習への提言

—文学的な文章を主体的に読む力を育てる学習指導の在り方—

A Proposal for Enhancing Child-Centered Active Learning in Japanese Language
Classes: Cultivating the Abilities to Actively Read Literary Works

仲井文之 水上義行
Nakai Fumiyuki Mizukami Yoshiyuki

はじめに

文部科学省では、平成20年(2008年)に小学校学習指導要領の改訂を行い、平成23年度(2011年)から完全実施している。前回改訂の柱の「ゆとり教育」が学力の低下を招いていると批判を受けたのは、2004年にOECD(経済開発機構)が実施した「生徒の学習到達度調査」(PIISA)の結果発表であった。

PIISA調査は、「読解力」、「数学的リテラシー」、「科学的リテラシー」、「問題解決能力」の4分野にわたり主に記述式で解答を求める問題により行われるもので、我が国の児童生徒の学力は、特に「読解力」に課題があるとされた。ただ、我が国の国語教育等で従来用いられていた「読解」ないし「読解力」という語の意味するところとは大きく異なっている。¹⁾

PIISAで測定している読解力 Reading Literacy は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力」と定義される。これは、学習指導要領にいう「生きる力」に直結し、国語科「C 読むこと」領域の目標及び内容もまたこの概念に添うものとなった。これからの「読むこと」の指導は、学習者である児童が、目的を持って自ら学び、言語活動を通して言葉の知識や技能を習得すること、読む力を身に付け、考えを深めたり、広げたり、よりよい判断をしたり、表現する力を高めていこうとする態度の育成が図られなければならない。²⁾ すなわち、主体的に読む力、読む態度の育成がポイントであると考えられる。

本稿では、「主体的に読む力を育てる学習指導の在り方」を副題に、文学的な文章の実

践事例を取り上げ、子どもが生きる学習過程及び学習活動について探ることにする。

1 主体的に読む力を育てる学習過程 — 自立発見読み学習法に学ぶ —

戦後の文学的な文章の指導法として、三層法や一読総合法がよく知られる。児童が主体的に学ぶという視点では課題もあり、学校現場では様々な工夫を加えた指導が試みられてきた。最近では、二瓶弘行氏の「対話」活動を重視した学習過程³⁾が目を引く。

「自立発見読み学習法」は、奈良女子大学附属小学校元教官の尾石忠正氏が、同校会誌『学習法』に掲載した論文⁴⁾である。30年が過ぎたが、主体的に読む力を育てる指導法として、再評価されるべきと考えており、改めてこの学習法について見ていくことにする。

(1) 「自立派遣読み学習法」の定義

「自立発見読み学習法」の論を展開するにあたり、尾石氏は次のように述べている。

- ・自立とは、文字通り自ら立つという意味である。ひとりだちである。学習を自らの力で、進めて行けること、自ら方法を開発し、自ら解決を図る一連の活動である。
- ・発見とは、まだ知られていない、気づいていないことをはじめて見つけ出すことである。ひとりひとりそれぞれに生きている子どもにとって、自らの手による発見は、その子にとって大きな意味を持つ。
- ・自立発見読み学習法は、目指す所、自ら立ち、自ら発見的に読み進め、読み取することを願っている。(下線 引用者)

一連の活動とは、主体的な活動を意味することに他ならない。この活動の有効性をさらに高めるために、集団での話し合い活動、学習の振り返りの活動がある。一連の学習活動をつなぐと望ましい学習過程が見えてくる。

(2) 「自立発見読み学習法」の学習過程

次に記す①～④は、自立発見読み学習法の氏が名付けた学習過程である。(・印の学習活動は論文の記述から整理。)

① かたち読み

- ・教師の音読を聞く。
- ・自らの音読に取り組む。
- ・互いの音読を聞き、批評し合う。

導入時点ではまず文章に馴染む必要がある。音読を手がかりに、語のまとまり、リズムなどを理解し、次の過程に進むための「かたち」を整えている。

② みつけ読み

- ・指示された時間内で、自分の学習のめあてと計画を立てる。
- ・学習計画にしたがって「ひとり読み」をする。読み取ったことはノートに書く。

「この話は一口でいうとどんな話か」と直観的な受け止めたものを問い、次に「それは、どうなっているからか」と説明を求める。児童は、一人きりで読み、読み進め方を見つけ、ノートに記す。主体的であることは個の強さを鍛える必要があると説いている。

③ ひびき読み

- ・自分が作り上げた読み、読み進め方を発表する。
- ・発表を聞いて批評し合う。

友達の読み、読み進め方を聞き、よさ、がんばりを知る。批評を受け、自己を知る。独りよがりには陥らせず、次への意欲を持たせることの大切さを説いている。

④ あしあと

- ・その日の学習で、自分が得たものは何であったかを振り返りノートに書く。
- ・単元の終わりにも、一連の学習について振り返り、ノートにまとめとして書く。

児童は毎時間、学習の終わりに、自己評価を行う。単元の終わりにも、全体を振り返る。自己の取り組みを振り返らせることが、次の学習への構えとなることを説いている。

以上が、学習方の骨子である。この学習過程をもとに各過程における学習活動について私の実践を交え、さらに考えていくことにする。

2 音読・朗読が技能の習得と内容の理解を助ける

児童は本来お話を聞くことが好きである。母親や祖母などが語る民話や昔話、図書館で行われる絵本の読み聞かせなどの際の幼児の様子からも容易に判断できる。そこには、自分の知らない世界・出来事への興味・関心、物語の展開への期待・驚きといったものがある。学校の授業で物語教材を扱う際にも、これらを土台に学習活動が展開されれば大きな成果を得ることができる。

(1) 教師の音読

物語教材と児童の初めての出会いは、教師の音読がよいと思う。聞き慣れた教師の声、十分に準備された語りに、児童は心を開き、心を揺さぶられながら物語の世界に浸る。音読が終わるとため息も似た声が聞こえるのは、どの教室でも普通に見られる光景である。

教師の音読は、児童に物語世界を味わわせるのに十分の働きがあり、味わった後に感想を聞くと、次への学習につなげることができる。自立発見読み学習法では、「先生の読み方についてどう思うか」と問い次に取り組む音読への動機付けとしている。私は、音読に併せ、何かを感じた箇所や言葉に線を引くことを指導し、習慣化していった。

(2) 児童の音読

「C 読むこと」領域における各学年の「音読に関する指導事項」では、明瞭な発音、声の大きさ、リズム等の技能の習得、語のまとまり、つながりなどを理解の上で音声化から始まり、学年が進むに連れて、文章内容の理解、さらに、文章を読んで感じたことや思ったこと、考えたことなどを大切に、思いが伝わるような音読・朗読を目指している。

自立発見読み学習法では、「どこが読みにくい、それはどうしてかに気を付けて友達との音読を聞いたり、自分で読んだりしてみよう。」と理解と技能の習得を念頭において指導している。

音読は、単に技能を習得するだけでなく、幾度も繰り返して読み、内容を把握すること、

最終的には、自分の読みを朗読というかたちで表現する。能動的で主体的な学習活動であることから、「どのように音読したいか。それはどうしてか。」と音読の表現そのものを学習活動にすることもできる。学習過程のどの段階でも取り入れることができ、その効果も大いに期待できることから是非とも活用したいものである。

3 主体的に読み進めていく学習問題・共通課題を設定する

(1) 児童が作る学習問題

「自立発見読み学習法」では、一口感想をもとに学習活動を展開していく。私は、「自分が考えてみたいこと」として、児童が学習問題を作り、答えも自分で出すという学習活動が効果的であると考えている。それは、中・高学年であっても、その後の学習を行うに値する感想が簡単に言えないという事実をこれまでの経験で知ったことが大きい。

そこで、「自分が考えてみたいこと」とすれば、様々なレベルの学習問題が出てくる。低いレベルの学習問題であっても、自分で作った問題には真剣に取り組む。取り組みを通して、問題を作る力や、読む力を少しずつ向上させていくことの方がより大切だと思う。

(2) 教師が提示する共通問題

共通課題は教師の側から提示したい。共通課題には、教師の教材研究の深さが潜む。児童が答えを探る際に、多様な読み、根拠とする叙述も多様になる課題がよい。叙述を点とするなら、点は幾つもあり、つないだり、場面をまたいで説明できたりすればより説得力を増す。点から線へ、線から面へ広がりが必要であることを意識させたい。

私は、4年「ごんぎつね」（新美南吉・作）の授業実践⁵⁾で、次のような共通課題に言葉書きを添えて提示したことがある。

① ごんと村の人々

- ・ごんは村人をどう思い、また村人はごんのことをどう思っていたのでしょうか。
そのことについて読み取ってみましょう。

② 上手な表現

- ・この作品で上手だなと感じさせる書き表し方があったとしたら、それがどうして上手だと思うのか自分なりにはっきりさせていきましょう。

③ 心が動かされたこと

- ・この作品を読んで心が動かされたとしたら、それはこのお話のどこがどうなっているからなのか、をはっきりさせてみましょう。

間口が広く、答えに自由度があると考えて設定した。悲しい結末に至る経緯、描かれる世界の美しさを感じ取らせたいとして考えた課題であった。

(3) 一人きりで進める「ひとり読み」の学習活動

学習問題も共通課題も答えは「ひとり」で考え、ノートに書いていく。一人きりの強さを作ることは主体性を育てることで大切な学習活動である。シーンと静まり返った教室で、カリカリと鉛筆の走る音、教科書をめくる音だけが聞こえる。自分が考えたい問題に責任

をもって答えた経験は、やがて生きてくる。

4 話し合いにそれぞれの読みが生きる

(1) 話し合いの導入場面では目当てを確認する

共通課題③「心が動かされたこと」の後の話し合いは、友達「心が動かされたこと」を聞いてどう思ったか、メモしながら聞くことを指示した。その際に、児童に「どんな意識で聞くつもりか」を尋ねると、次の答えが返ってきた。

A 自分と比べて違うところや、その人だけが表している文などを聞いていきます。

B 心を動かされた場所や、どうして心が動かされたのかをメモに取ります。

C 友達のよいところや、参考になったところをメモしていこうと思います。

話し合い場面で、「発言者に注目する」、「うなずきながら聞く」などを指導することもあるが、音声は消えることから、学習を振り返りにメモは欠かせないと考え、メモを取る力を育てることを重要視している。メモの内容は、①自分との違い一場所（叙述）、内容、理由、②友達のよさ一表現のしかた、人間性などを観点に指導したい。

(2) ひとり読みでの読みを発表する

発表の3人は、教師が事前にノートを点検し、他の児童の参考になるものを選んだ。ノートは読んでよいし、読まずに発表してもよいことにしている。要は、相手に伝えようという意志、聞きたいという意志を持つ学級であればよいと考える。

D 「青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。」ここは読み終わると、ため息をついてしまいそうな文です。兵十にうたれて死んだだけでもかわいそうなのに、青いけむりが出ていると、余計に感動してしまうのです。これまでのごんの行動を思い浮かべ、兵十が反省しているように書いてあると思いました。2つめは、「ごんは目をつぶったまま、うなずきました。」というところです。ごんが反省していることを兵十が分かって死んでいったところで一番よいと思いました。ごんの顔を思い浮かべると、うれしそうな顔が浮かびました。

E 私が心を動かされたのは、「ごん、お前だったのか、いつもくりをくれたのは。」と言った兵十の言葉です。ごんに対してのやさしさが初めて聞け、兵十が恨みも忘れて悲しさでいっぱいになり、悔やみ、ごんを思いながらがんばって生きていく姿が心に残るからです。また、ごんが天国で兵十を見守る姿が思い浮かびます。もう一つは、「ごんはぐったりとして目をつぶったまもうなずきました。」というところです。ごんがうなずき、それを見た兵十が、後からしおれるのが、伝わってくるからです。ごんが死んでしまったと思うと悲しくなります。でも、ごんは、分かってもらえてうれしいでしょう。私は、それが一番悲しい文だと思います。

F 私は、いたずらばかりするごんが、どうしてよいことをするようになったのかと思いながら読みました。兵十がおっかあに死なれて一人ぼっちになったとき、兵十のさみしい気持ちが分かったのだらうと思いました。初めて人の気持ちが分かり、毎日くりなどを持っていくようになったのだらうなあ。私だったらいくら何でも毎日毎日一

人のために、ごんのような行動がとれるか分かりません。ごんは火なわじゅうでうたれても兵十をうらんだりする気持ちはなかったと思います。反対にうれしかったのだと思います。ごんは、いたずらぎつねでなく、本当は心のやさしい小ぎつねだったと気づいたとき、とても心を動かされました。

授業中の会話は丁寧な言葉遣いでされる。自分を高みへと導いてくれる友達への敬意を忘れないようにしたい。ここでは三人三様の読みが好ましい。Dは、悲しく感じさせる原因を考え、結末の表現を指摘している。Eは、ごんと兵十の心を想像し、願いを込めて二人の今後を想像している。Fは、ごんの人間性、成長を読むと同時に、自分について考える機会にしている。

(3) 話題を焦点化し、互いの読みを深める

感想を述べさせた後、観点を示して話し合いを焦点化する。ひとり読みには幅があり、それを語るだけでは読みが深まらないことから、一段階上の読みへ誘うため、教師は次のように発問した。

T あなたたちが心を動かされたことは、一番最後と関係があるのではないかと思います。つまり、「青いけむりがまだつつ口から細く出ていました。」ですが、これはいったい何を表しているのでしょうか。

G うたれたごんも、兵十のごんに対してのうらみの気持ちも、けむりのように、静かに消えていくと思いました。

H 私は、ごんが静かに天国に上っていくのだと思います。

I ぼくは、ごんが、「これでいいんだ、これでいいんだ」と言いながら青いけむりと一緒に天国へ行ったのだと思います。

J ぼくの場合は、青いけむりは、何か悲しみが出てくるように感じました。

K 付け加えて。青いけむりから、兵十のごんをうった悲しい気持ちと、ごんがうたれた気持ちが空に舞い上がっていくと思います。

L ぼくは、兵十のうらみの心とごんの命の悲しいけむりが天に上っていくのだと思います。今までであったことが全部のせられていくんだと思いました。

この作品の主題が何かは問題ではない。「青いけむり」を通して、悲しい結末の余韻、死を代償に成就したごんの願いを感じ取れば、十分に、読んだことになると思う。

5 学習を振り返り自己評価を記す

(1) 「あしあと」をその日の学習の最後に記す

M児は「今日の学習で参考になった人はたくさんいました。文から読みとるやり方と文に書いてない読み取り方があり、このごろは文から読みとる読み方が多いと思いました。」と書き、叙述に根拠を求める学級の成長に言及した。続けて「やっぱり話し合いはいいな。今までのこの話に対しての不満が一度にばく発するようです。この話し合いをするのがとても楽しみでした。やってみると、みんなの気持ちが分かり合えたりするからです。」と

記し、話し合いを楽しみ、考えを作ることの大切さを実感している。

(2) 一連の学習を振り返って「あしあと」を記す

単元全体を振り返りN児は、「この学習は、自分をきたえ、だれでもたくさん発表できるようにする勉強だと思います。それには、自分の意見、みんなの意見、ちがう意見を出し合って勉強していく、自分をきたえてくれる勉強だと思います。勉強の進め方は少しおそいときもあったけど、自分のスピードで書いていき、その問題を解決していけばいいと思います。自分のための一人学習の時間だから自分なりにつかえばいいと思います。」と書き、主体的に学ぶ価値を感じ取っている。また、「自分の思ったこと、わかったことなどをたくさん書けるようになったのは、この物語を書いた新美南吉さんのおかげでもあるのです。文の中で考えさせられたこと、感動させられたこと、悲しいことが書いてあったからです。そういうことで進歩しました。」と記した。

二瓶 弘行氏は、文学作品を集団で読むことの意義を「ともに読み合う仲間の存在こそが、文学作品を読む面白さを再確認させてくれるのである。」と述べている。N児の「あしあと」は、正に優れた作品との出会うことの大切さを気づかせてくれている。

おわりに

子どもは自らが成長したいと願う存在である。音読が上手になりたい、気持ちが表れる朗読をしたいと願うことはごく自然なことである。読むことに関しても、疑問に思うことの答えを探ったり、自分の読み方を友達と比べてみたりするのは、分かりたいという願いからくるものである。この気持ちを大切にすることが、主体的に読む力と態度を育てることになる。授業が知識の伝達や読みの押しつけになったり、作り上げた読みが否定されたり軽んじられたりすれば、主体的に取り組もうとする気持ちは一瞬にして瓦解してしまう。

主体的に読む力を育てる学習指導を通して、児童は自分とは違う他の存在を知り、学ぶことの意義を理解したり、友達のよさを認めたり協力したりする。そういった児童の姿を見ることに教師の喜びがあることを声を大にして言いたいと思う。

参考文献

- 1) 文部科学省 「PISA 調査(読解力)の結果から明らかになった課題」(2015)
- 2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 国語編』(東洋館出版社 2009)
- 3) 全国国語授業研究会・筑波大学附属小学校国語研究部 『読解力を高める 表現力を高める 国語授業のつくり方』(東洋館出版社 2012)
- 4) 奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会『学習研究』284号～305号(1983～1987)
尾石忠正 「自立発見読み学習法 (I～XIII)」
- 5) 富山県教育論文・教育実践記録概要(富山県小学校教育研究会 1990)
仲井文之 「自らの読みを作り上げる物語文の指導」(8P～47P)